

特別寄稿

鉄の街と 希望学

東京大学社会科学研究所教授
玄田 有史氏

東京大学社会科学研究所では、2005年度より、希望と社会の関係を考える研究プロジェクト「希望の社会科学研究（通称「希望学」）」に取り組んできた。

希望学セミナーの開催やインターネットを活用した全国的な社会調査、釜石における包括的な大規模訪問調査（2006～2008年度）、そして希望に関心を持つ外国人研究者との国際シンポジウムやワークショップの開催など、さまざまな活動を行い、本年これらの研究成果を綴った『希望学』（全4巻）を刊行した。釜石調査では、当社釜石製鉄所が支援・協力を行った。

本稿では、本プロジェクトの研究代表者である、東京大学社会科学研究所教授の玄田有史氏より、釜石での調査結果を含めて、「希望学」についてご寄稿いただいた。

希望学と東大社研

2006年1月26日午後1時半すぎ。駅前に大きな新日鉄の看板が聳え立つ、岩手県釜石市に、私は同僚二人(宇野重規、中村尚史)と、はじめて降り立ちました。それから、ある学問を打ち立てることを目的に、数十人の研究者が釜石に何度も通い続けることになりました。

その学問の名前は「希望学」といいます。正式名称は「希望の社会科学」です。希望と社会の関係を考えることをテーマに、私たちの所属する東京大学社会科学研究所(略称「東大社研」)において、2005年からはじまった研究プロジェクトです。

東大社研は、法学、政治学、経済学、社会学など、社会科学と呼ばれる学問分野の研究者40数名からなる研究所です。戦後すぐの1946年に設立されました。

設立以来、研究所は、3つの社会的使命をもって、活動しています。第一は、日本の現実と同時に、諸外国の実情をも正確にふまえ、国際的な比較研究を行うことです。第二は、狭い学問分野にとらわれることなく、社会科学の分野における学際的かつ総合的な研究をめざすことです。第三に、学問のための学問ではなく、理論と実際の結合を考え、学問研究の成果を国民生活

に還元していくことです。

では、そんな研究所が、どうして希望学などという、耳慣れない研究に取り組むことになったのでしょうか。

あるときから、日本社会は閉塞感や不確実という言葉を用いて語られることが、なかば常識のようになってきました。その状況は、しばしば「希望がない」という言葉につながっていきました。最も象徴的なのが、2000年に刊行された作家の村上龍さんによる『希望の国のエクソダス』という小説のなかの、「この国には何でもある。本当にいろいろなものがあります。だが、希望だけがない」という一文でしょう。

希望があるかどうかは、しよせん、個人の心のもちようの問題だと考える人もいます。ですが希望学では、希望は個人の内面だけの問題でなく、むしろ個々人を取り巻く社会のありようと強くかかわりあっていると考え、研究を続けてきました。

さらには「希望なんて、学問になるのか?」といった、冷めた声を向けられることもありました。希望とは何か。それが社会の姿とどのような関係にあるのか。そこに簡単な答えなど、すぐにはみつからないだろう。希望学をはじめたときから、メンバーの誰もが、覚悟していました。



プロフィール●げんだ・ゆうじ

1964年島根県生まれ。東京大学経済学部卒業。学習院大学経済学部専任講師、助教授、教授を経て、2002年より東京大学社会科学研究所助教授、2007年より現職。専門は労働経済学。主要著書は、『仕事のなかの曖昧な不安～揺れる若年の現在』(中央公論新社、2001年、サントリー学芸賞、日経・経済図書文化賞)、『ジョブ・クリエイション』(日本経済新聞社、2004年、労働関係図書優秀賞、エコノミスト賞)、『14歳からの仕事道(しごとみち)』(理論社、2005年)など。2009年、釜石での研究成果を綴った『希望学』(全4巻)東大社研・玄田有史・宇野重規・中村尚史編(東京大学出版会、2009年)を刊行。

しかし、これだけ「希望のなさ」が語られる時代、その背景には何があるのか、考えないわけにはいかないじゃないか。その解明が、国民の声なき声として求められているのなら、むずかしいテーマだからといって、逃げるわけには、いかないじゃないか。そんな思いをもって、私たちは希望学の追究を決意しました。



釜石製鉄所 第一高炉(左)、第二高炉(右)(当時)。第一高炉は1989年に、第二高炉は1985年に休止された。

現在の釜石製鉄所線材工場。線材事業と電力事業を両輪として事業展開を図っている。



なぜ釜石なのか

希望学にとって、釜石は忘れられない場所になりました。ただ「どうして釜石なの?」「希望と釜石とどういう関係があるの?」と、よくきかれました。そこで、その理由をお話してみたいと思います。

私たちは、希望の研究をすすめるなかで、何度かアンケート調査を行いました。そこからは、社会のなかの希望に関するさまざまな実態が、浮かびあがってきました。

希望がないといわれるが、はたして、どのくらいの人たちが、そのように感じているのでしょうか。20代から50代の約2千名の方々にご協力をいただいた調査結果によると、およそ3人に1人が、将来に何も希望がない、もしくは希望があってもたぶん実現しない、と感じているようでした。その数字は、けっして小さなものではないと思います。

では、どんな人たちが、希望がないと感じているのでしょうか。まずははっきりとした特徴として、収入の少ない人、仕事のない人、健康に不安を抱えている人、十分な教育を受けられなかった人、そして年齢の高い人ほど、一般的には、希望がないと答えがちのようです。

反対に収入や仕事、さらには健康や学歴などに恵まれた人ほど、未来に大いなる可能性を感じやすいでしょう。また若い人には、時間という有限で貴重な資源が通常、高齢者よりは多く与えられています。そう考えると、経済の停滞によって収入や仕事に恵まれない人が増えたり、高齢社会になるにつれて病気がちな人が増えつつある今の社会は、希望を持つことがむずかしい時代といえるのかもしれません。

ただ、収入、仕事、健康、学歴などに恵まれない人、特に高齢者は、希望を持ちにくいというだけでは、あまりに身も蓋もない結論です。かりに、そんなきびしい状況にあったとしても、それでも、希望を持ち続け、勇気をもって挑戦し続けている人が、きっとどこかにいるんじゃないか。

実際、アンケート調査からは、一つのヒントがみつかっていました。それは、過去に挫折や試練を経験し、それをくぐり抜けてきた人たちほど、未来に希望を持って突き進んでいるという事実でした。

釜石はかつてまぎれもなく、輝く「地方の希望の星」の一つでした。高炉の炎が24時間燃え続け、人がにぎやかに出入りし、その華やかさが、東北の上海のような街と小説に例えられたこともありました。そして、いうまでもなく新日鉄釜石ラグビー部。当時成人の

日であった1月15日、国立競技場における日本選手権七連覇(1978~84年)。選手の勇姿とスタンドの一角を占める大漁旗の一団の歓喜。遠く山陰からテレビを通じて観るだけだった少年の私にも、その光景は地方の誇りとして、今でも深く記憶にとどまっています。

そんな釜石も、製鉄所の合理化という試練を経験してきました。考えてみれば、釜石は戦後の合理化だけでなく、戦前は二度の津波、戦争中は艦砲射撃と、苦難を何度も経験してきた歴史があります。現在、若者の多くは仕事と進学のため、街を離れていきます。高齢化も急速に進み、かつての半分以下にまで人口も減少しています。

しかし、そんな栄光と挫折を経てきた釜石だからこそ、希望を失わず、行動を続けてきた人々がいる。その声に耳を澄ますことで、むずかしい時代における希望が、みつかるかもしれない。そんなことを語ってくれた何人かの友人がいました。そのなかには、新日鉄関係の人々もいました。

挫折の向こうにある希望

釜石で私たちは、製鉄所のOBのみなさんをはじめ、さまざまな困難や試練を経験されてきた方々に数多くお話をうかがってきました。そのお話には、思い出すことすら過酷に感じられ



釜石鉱山での現地調査

* 採掘終了後の坑内を、音響実験ホールとして活用。



遠野市の酪農家でのインタビュー調査

* 地元企業が高炉休止後に、保有技術を活用して脱臭装置を開発。鶏舎での消臭効果実験を行った。



エヌエスオカムラでのインタビュー調査

* 岡村製作所と新日鉄が共同出資して、事務用家具などの製造会社を設立。



るほど、
きびし
い内容
がたく

さんありました。

ときには苦しい状況での、あのときの決断が、はたして正しかったのか、今でもわからないといった表情を浮かべられることもありました。

ただ、本当に不思議なことに、そんな挫折とでもいうべき苦しい状況をくぐり抜けてこられた方々の言葉と表情には、どこか不思議な清清しさ、そして潔さがあったのです。

製鉄所の合理化後、街全体に明るさを取り戻そうと、遊園地を開業したものの、まもなく倒産。借金を二十年近くかけて返済し、その後も生まれ故郷である製鉄発祥の地の雇用確保のため、天然水の事業に取り組んでおられる老人がいます。「どうすれば困難は乗り越えられるんですか」という私の質問に、その方は「三人わかってくれる人がいたら、だいじょうぶだから」と、訥々とした釜石弁でおしえてくれました。

さまざまな試行錯誤から得られた教訓として、「結局、たなからばた餅ってことは、ないんですよ」と語る経営者もいらっしゃいました。会社や市、県などに頼るといふ発想だけではダメなんだ。まずは、何はともあれ、自分でリスクを取り、自分で行動しなけ

れば。挫折の向こうにある希望とは、そういうことなのかと、教えていただいた気がします。

希望学では、あまりに損得勘定ばかりにとらわれず、ときには無駄になるかもしれない挑戦を厭わない人ほど、実際には希望に出会いやすいことを物語る、アンケート調査の結果もありました。「人生、無駄っていうことはないんです」。そんな結果を、みごとにまでに体现した、苦しいときを経験した人にしか発することのできない珠玉の言葉の数々が、釜石にはありました。

1989年の高炉休止の際につくられた石碑が、高炉から移された炎とともに、製鉄所の入り口近くにありますが(その炎は現在、近代製鉄発祥150周年記念モニュメントとして、釜石駅前にも、灯されています)。「永遠(とわ)に」と題された石碑の最後は、「鉄づくりにかけてきた誇りと情熱がこの炎に引き継がれ、今後とも、我々に挑戦する勇気と未来への希望を与えてくれることを願い、ここに記念碑を建立するものである。」と結ばれています。

希望の多くは残念ながら、失望に変わります。けれど失望を乗り越えた先に、本当の希望が待っている。だから釜石から、そして鉄の物語から、希望は永遠に失われないと、私たちは今、考えています。

無論、だからといって、現在の釜石



プロジェクトの研究成果を綴った『希望学』
(全4巻) (東大出版会、2009年)

がすべて順調なわけではありません。調査に参加した経営史の専門家である一橋大学の橋川武郎教授は、釜石市民に言いました。「釜石に希望はある。だが、もっとあるはずだ。まだつながっていない」と。

釜石を含めた地域の再生には、「ローカル・アイデンティティ(地域の個性)の再構築」「希望の共有」「地域内外でのネットワーク形成」の三つが不可欠という仮説に、希望学は釜石で辿りつきました。そんな仮説が妥当であるのか、これからは希望学では釜石を見守り続けたいと思います。

そして、そんな地域の希望の再生に向けた取り組みは、きっと釜石だけではないでしょう。新日鉄の全国各地の製鉄所においても、希望に向けた取り組みを続けている方々が、たくさんいらっしゃるかと確信しています。そんなみなさんのお話を、いつかうかがってみたい。それが希望学の仲間たちの、今のささやかな希望です。

希望学のいま

現在希望学は、福井県を舞台に移し、希望を、仕事、生活、家族、子ども、女性などのキーワードと関連づけつつ、調査研究を開始している。生活満足度の高い福井県のなかで、希望がどのように生まれようとしているのか、県民の皆さんと共に考えていく。(写真右は敦賀港を視察する様子)



釜石製鉄所 第一高炉休止時につくられた「永遠(とわ)に」の石碑